

# 高等学校の世界史教育と大学の歴史学

—歴史教育の接続の観点から—

徳橋 曜 小林 真

# 高等学校の世界史教育と大学の歴史学

—歴史教育の接続の観点から—

徳橋 曜 小林 真

High School Education of the World History and Historical Studies in the University  
—From the Viewpoint of Connection between Two Types of Historical Education—

Yo TOKUHASHI Makoto KOBAYASHI

## 摘要

この10年ほどの間、高校の現場や大学の教員の間で、世界史教育の在り方がしきりに議論されるようになってきている。その中で、高校の世界史教育がどうあるべきか、あるいは大学で世界史をどう教えるべきかという議論や研究は少なくないが、高校の世界史教育と大学の歴史学・歴史教育をどうつなぐかという点については、必ずしも十分な検討がなされていない。本稿では学生へのアンケートから、世界史教育の意義や高校と大学の歴史教育の関連性をめぐる彼らの意識を検討し、高校の世界史教育と大学の歴史教育の接続の在り方を考察する一助とする。

キーワード：世界史，高等学校，大学，歴史研究，アクティブ・ラーニング

Keywords：World History, High School Education, University, Historical Studies, Active Learning

## I. 目的

高等学校教育において世界史 A と世界史 B の二つの科目が設けられ、1994 年度にそのいずれかの履修が義務づけられるようになって、20 年以上が経過した。この間、この世界史の必修化や高校生の学力の変化に伴って、改めて世界史教育の方法論が議論されるようになった。世界史を学びたい、あるいは大学受験等のために「学ぶ必要がある」と意識する生徒のみならず、すべての生徒が世界史を学ぶという環境が生まれたことで、世界史をどのように学ばせるべきかが教える側に意識されたという側面も指摘できよう。いわゆる「世界史嫌い」への対応も含め、「世界史」とはいかなるものであるべきなのかを社会の変化を見据えて考えていかなければならない、という危機感が高校・大学の歴史教育の世界に広まってきたように思う。その危機感は、歴史学を含む人文科学の有用性や必要性を否定するような見解が、社会に広まりつつある日本の状況、史実や歴史認識を無視するような偏狭なナショナリズムの世界的横行によって、さらに高まっている。

既に 2009 年 5 月の歴史学研究会大会における特設部会で「社会科世界史 60 年」がテーマに取り上げられ、そこでの報告と討論要旨とは同年 10 月の『歴史学研究』859 号に掲載されている。このときに小川幸司が指摘したように、「世界の歴史」を余すところなく網羅的に学ばせることなど不可能であるのに、できる限りの知識を

習得させようと教師達が努力してきたことが、「世界史は面倒臭い」という高校生の意識を増大させた側面は否めないであろう<sup>1</sup>。そもそも、ある歴史家（即ち本人）が息子から「パパ、それじゃ歴史が何の役に立つのか僕に説明してよ」と言われたという、マルク・ブロックの『歴史のための弁明』の有名な書き出しを引き合いに出すまでもなく、何のために歴史を学ぶのか（学ばされるのか）、という問いは昔から繰り返されてきたものなのである<sup>2</sup>。

「何のために？」という問いが引き出されるのは、歴史の学習がしばしば字句の暗記に終始するところによる。多くの歴史家や論者が、歴史は暗記の学問ではないと言い続けてきたが、その一方で、歴史は暗記ではないと主張する我々大学教員自身が、大学入試センター試験や二次試験で暗記力を問うような出題をしているのである。こうした状況において、大学と高校の教員から成る高等学校歴史教育研究会は、高等学校における歴史教育と大学入試の抜本的改革の検討を掲げ、2014 年に全国の大学、高等学校、予備校、出版社等を通じて、高校歴史教育の改革をめぐるアンケートを実施した。その結果と同研究会の分析によれば、回答者の 7～8 割が、高等学校の歴史教育が大学入試への対応に追われ、暗記中心の授業になりがちなこと、その結果として生徒の歴史的思考力を育成する授業が十分に展開されていないことなど、高校の歴史教育が大学入試によって大きく制約されている現状を認めている。そして、この問題を解決する方策として、生徒の関心を引く授業に力を入れること、

細かな用語の暗記力を問うのではなく、歴史的思考力を問うような入試を大学が行うことなどに多くの賛意が示された。回答者の5割が、生徒の歴史系科目への関心は必ずしも低くはないと認識している点は、歴史教育の将来に希望を与えてくれる。実際、意欲的な世界史教育の試みや提案も少なくない。前述の小川幸司（彼は上記の高等学校歴史教育研究会のメンバーでもある）や梅津正美、田尻信壹などの提案は、授業の工夫次第で生徒の関心や思考力を引き出すことができることを示している<sup>4</sup>。

しかしながら、ことはそれほど単純ではない。小田中直樹は、大学生（即ち元高校生）に対するアンケート、彼らの出身高校の教員に対するアンケートとインタビューによる調査から、高校の世界史教育の現場における様々な方法論、あるいは個々の教師が抱える迷いや悩みを丹念に分析し、歴史学という学問の本質とも照らし合わせながら、世界史授業の方向性を検討している<sup>5</sup>。高校の現場の教師の努力・勤勉さには頭が下がる。だが一方、先の高等学校歴史教育研究会によるアンケートにおける、歴史教育における高等学校と大学の接続の問題点に関する質問への回答によれば、高校の授業で得たはずの歴史に関する知識が、大学入学までに定着していないという見解を、60.3%の回答者が肯定している。また、高校までの授業が生徒の思考力育成に結び付いていないために、大学教育との接続がうまくいっていないという見解にも、68%の回答者が同意している<sup>6</sup>。これらは筆者自身も大学の講義でしばしば実感する問題である。とはいえ、暗記中心の歴史教育を問題視しながら、歴史知識の定着を求め、知識の定着が不足していると言いながら、思考力の育成も求める、というアンビヴァレントな要求をそのまま高校の現場に押し付けるべきではなからう。

確かに、思考力を培う授業やアクティブ・ラーニングの重要性は、近年とみに強調されるようになった。2020年度から実施される次期学習指導要領をめぐっても、討論型の授業の導入が重要な改革点として掲げられている。歴史教育においても、ただ歴史的用語を暗記すればよしというものでないのは当然である。しかし、歴史に関して思考するためには相応の知識が必要とされる。その知識は日常的に経験したり身に付いたりするものではなく、あくまでも学び、自分の中に定着させておかなければならない。前述のアンケートの自由記述では、大学側から「基礎的な知識がないまま思考力を伸ばす授業を行って成果が得られるのか疑問」と、高校歴史教育改革の危険性を指摘する意見も出されているが、それは当然の不安と言えよう<sup>7</sup>。但し、高校側からは同様の疑問の声は出ていない。ここには高校と大学の歴史教育に関する意識や方向性の差異があるのであろうか。そうであれば、この差異を双方から埋めていく努力が必要であり、それこそが高校と大学の歴史教育の接続ということにならう。南塚信吾は、大学においても、「西洋史」「東洋

史」「日本史」の区別あるいは一国史の枠組を超えた「世界史」教育は、可能であると指摘している<sup>8</sup>。また、今年2016年には、南塚も責任編集に加わった『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える』が出版された<sup>9</sup>。こうした試みはこれからも進められていかなければならない。

では、個々の大学の授業のレベルにおいて、我々大学教員は高校と大学の教育の接続をどのように進めていけばよいのであろうか。前述の高等学校歴史教育研究会の代表でもある油井大三是郎は、2015年の第65回日本西洋史学会大会において、「世界史教育における大学と高等学校校間の壁をどう乗り越えるか。—高校教科書、大学入試、教員養成課程、高校教員研修などに注目して—」と題した小シンポジウムを主催した。筆者はこれに示唆を受けて、ささやかながら自分の講義において高校と大学の教育の接続を試みることにした。そこで、まずは歴史教育や大学の歴史の講義と高校の世界史とのつながりについて、学生がどのように意識しているのか、高校での世界史の学びが大学での歴史学の講義の受講にどの程度つながっていくものなのかを明らかにしようと考えた。これが本稿の目的である。

## II. 方法

以上のような問題意識と目的を踏まえて、本年度(2016年度)前期の学部の講義においては、「史実を理解し、記憶する」という側面と並べて、「史実について考える」という要素を特に意識的に取り入れた。先に触れたように、歴史の講義では学生達に考えさせるといっても、史実に関する知識が前提となる。その点を授業中に彼らに問うていくのであるが、その際、高校の世界史で学んだはずのことであるということ、しばしば意図的に強調した。具体的な授業名は以下の3つである<sup>10</sup>。

- ①環境歴史学(対象1年生以上)
- ②ヨーロッパ地域史論(対象2年生以上)
- ③世界システム概論(対象2年生以上)

①は環境と人間との関わりや環境に対する意識という観点から、ヨーロッパおよびアメリカ合衆国の歴史を概観するものである。②は中・近世イタリア史に沿って、一つのテーマを論じ、考えさせる講義で、本年度のテーマは「中世ヨーロッパにおける自己と外界の認識」であった。③はウォーラステインの近代世界システム論を援用した西洋史概説であるが、ヨーロッパ世界に軸足を置きつつ、「世界史」としての視野も重視している。3つのいずれの授業も中学校社会・高校地歴の教員免許に関わる授業でもあるが、特に③の講義においては、歴史を教える上での素養を学生に身につけさせることを意識している。

これらの授業の最終回の講義(7月末および8月初)で、次頁に掲げるアンケートを実施した。授業そのもの

## 高校と大学の世界史・外国史教育に関するアンケート（2016年7月）

このアンケートは高校における世界史教育と大学における歴史教育の接続を考察する研究の資料として行うものです。このアンケートから得た情報は、所与の目的以外には一切使用しません。また個人が特定されることはありません。質問には番号に○をつけて回答して下さい。また一部の質問には記述で回答して下さい。

- 1) あなたの現在の学年は？                   ① 1年生   ② 2年生   ③ 3年生   ④ 4年生以上  
2) 高校で世界史を履修しましたか？       ① した → 質問3～14へ  
  ② しなかった → 質問15～20へ

以下の質問3～14には、質問2で①と回答した人が答えて下さい。

- 3) 高校での世界史の履修事情について

3-a) 高校の何年次に履修しましたか？

- ① 1年生の1年間   ② 1年生から2年生の2年間   ③ 2年生の1年間  
④ 2年生から3年生の2年間   ⑤ 3年生の1年間   ⑥ それ以外（                    ）

3-b) 履修したのは世界史AですかBですか？

- ① 世界史A   ② 世界史B   ③ AかBか分からない   ④ その他（                    ）

3-c) どのような内容でしたか？

- ① 古代から近現代まで網羅的に学習した② 前近代（18世紀まで）を主に学習した  
③ 近現代（19世紀以降）を主に学習した

- 4) 高校時代、世界史という科目が好きでしたか？

- ① 好きだった   ② どちらかといえば好きだった → 質問5へ  
③ どちらかといえば嫌いだった   ④ 嫌いだった → 質問6へ

- 5) 質問4で①ないし②と回答した人にうかがいます。好きだった主たる理由は何ですか？

- ① 内容が面白かったから  
② 内容に特に興味はなかったが、試験では点数が取れたから  
③ 先生の個性や授業の進め方が自分に合ったから

- 6) 質問4で③ないし④と回答した人にうかがいます。嫌いだった主たる理由は何ですか？

- ① 内容に興味を持てなかったから② 覚えることが多くて面倒だったから  
③ 先生の個性や授業の進め方が自分に合わなかったから

- 7) 大学入試センター試験で世界史（AあるいはB）を受験しましたか？

- ① した → 質問8へ                           ② しなかった → 質問9へ

- 8) 質問7で①と回答した人にうかがいます。世界史を受験した理由は何ですか？

- ① 世界史が得意だった（あるいは試験で点数が取れると期待できた）から  
② 高校での履修の都合上、世界史を受験科目に選択せざるを得なかったから  
③ その他

- 9) 質問7で②と回答した人にうかがいます。世界史を受験しなかった理由は何ですか？

- ① 世界史が苦手だった（あるいは試験で点数が取れないと予想した）から  
② 世界史は苦手ではなかったが、より点数が取れると期待できる科目が他にあったから  
③ 世界史を受験する必要がなかったから  
④ その他

- 10) 大学の歴史関係（西洋史・東洋史・日本史）の講義を受講するなかで、高校で世界史を学んだことが役に立ったと感じたことはありますか？

- ①ある → どんな点で役に立ったか、できれば具体的に書いて下さい  
 ②ない
- 11) 大学の歴史以外の講義で、高校で世界史を学んだことが役に立ったと感じたことはありますか？  
 ①ある → どんな点で役に立ったか、できれば具体的に書いて下さい  
 ②ない
- 12) 大学における歴史の講義は、高校までの世界史教育とつながっていると思いますか？  
 ①思う → どういう点でそう思うか、できれば具体的に書いて下さい  
 ②思わない → その理由を、できれば具体的に書いて下さい
- 13) 講義以外の場において、高校で世界史を学んでおいてよかったと思ったことはありますか？  
 ①ある → どんなことについてか、できれば具体的に書いて下さい  
 ②ない
- 14) 自分の過去の世界史学習を振り返って、もっとこういう点を学びたかった、あるいはもっと積極的に学ぶべきだったと思うことはありますか？  
 ①ある → 具体的にはどういう点についてですか  
 ②ない

質問2で①と回答した人は、以上で回答終わりです。ご協力ありがとうございました。

以下の質問 15～20 には、質問2で②と回答した人が答えて下さい。

- 15) 高校で歴史関係の科目を履修しましたか？  
 ①日本史を履修した ②歴史関係の科目は全く履修しなかった
- 16) 高校以外の場（予備校等）で世界史を履修しましたか？  
 ①した ②しない
- 17) 質問16で①と回答した人にうかがいます。改めて履修した理由は何ですか？  
 ①大学受験に必要なことから ②世界史を学んでおくべきだと思ったから  
 ③その他
- 18) 大学の講義を受講して、世界史を学んでおけばよかったと感じたことはありますか？  
 ①ある → どんなことでか、できれば具体的に書いて下さい  
 ②ない
- 19) 大学の講義以外の機会でも、世界史を学んでおけばよかったと感じたことはありますか？  
 ①ある → どんなことでか、できれば具体的に書いて下さい  
 ②ない
- 20) 大学における歴史の講義は、高校までの世界史教育とつながっていると思いますか？  
 ①思う → どういう点でそう思うか、できれば具体的に書いて下さい  
 ②思わない → その理由を、できれば具体的に書いて下さい

質問2で②と回答した人は、以上で回答終わりです。ご協力ありがとうございました。

に対する評価については別途、学部授業アンケートが実施されているが、以下のアンケートでは、高校で履修した世界史の授業と大学受験に関わる質問、そして特定の授業についてではなく、より一般化した形で大学の歴史の授業あるいは歴史以外の授業と高校世界史との関連性等に関わる質問を行った。さらに西洋史ゼミの4年生等にも同じアンケートを実施した。最終的に合計55名の回答を得た。回答者の学年の内訳は1年生4名、2年生21名、3年生21名、4年生以上9名である。

アンケートでは最初に現在の学年を問うた。学年によって意識が異なるか否かを確認したかったためである。高校生であれ大学生であれ、授業の意義や有益性の判断は自身の体験に依存している。多少とも年齢を重ねて知見や体験が増えることで、世界史教育や歴史学への見方・認識が変わる可能性があると考えた。

次に高校での世界史履修の有無を問うた。学習指導要領によれば世界史AまたはBは必修であり、また2006年に「未履修」問題が大きく取り上げられて以来、高校側の姿勢は是正されたはずであるが、後述のアンケートの結果に見られるように、依然として未履修の学生は存在する。無論、この質問項目は世界史を履修させずに済ませる高校を糾弾するためのものではなく、世界史を履修しなかった学生の世界史教育や大学の歴史関係の授業に関する認識に、履修した学生との異同が見られるのかを確認するために設けたものである。

世界史の履修事情に関する質問3は、高校の何年次にどのような形で二種類の世界史のいずれを履修したのか、確認するために設けた。世界史AとBとでは時間数も内容もかなり異なる。世界史Aは、「近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」ことを目標としており<sup>11</sup>、そのために時代横断的な視点も取り入れる等、意欲的な構成・内容になっているが、実情としては、相対的に少ない時間数で世界史を履修させるために用いられる傾向がある。しかし、世界史Aは、必ずしも歴史に関心がある訳ではなく、受験上の必要性も感じていない生徒によって履修されることが多いうえ、内容的には近現代史が中心であるためにより深く複雑で、実は高校生にとっては難しい。そうしたAとBの相違が、世界史という科目に対する認識やイメージに影響するかどうかを確認したいと考えた。また、必修科目としてAを履修した後、いわゆる「文系」の生徒のみが（おそらく大学受験を前提として）さらにBを履修するシステムを持つ高校もあるため、そうした履修を経験した回答者を想定して選択肢4を設けた。

質問4～9は、世界史という科目に対する好悪とその要因、受験科目として選択したか否かを確認するものである。これは、こうした要素が、世界史という科目や大

学での歴史学の講義に対する印象にどのように影響するかを確認することを目的としている。特にしばしば指摘されるように、受験科目であるか否かは、世界史を学ぶ動機・意欲、また知識の定着に大きく影響すると考えられるからである。

質問10～14は大学の歴史教育が学生からどのように受け取られているか、高校での世界史教育とどれだけつながって意識されているかを知るために設けられている。そのうち、質問10、11、13、14は、高校で世界史を学ぶ意義や必要性を学生達が大学の講義や日常生活でどの程度実感しているのか（あるいはしていないのか）を明らかにするためのものである。一方、質問12においては、高校の世界史教育と大学の歴史教育の関連性を学生達がどのように認識しているかについて、問うている。

さらに、質問2で世界史を履修しなかったと回答した者に対しては、質問15～20を設けた。世界史未履修の是非はさて置いて、高校で世界史を履修しなかった学生にとって、世界史という科目の必要性や意味がどのように捉えられているのか、また、自身が世界史を履修しなかったということに不利益を感じるのかどうかを確認したいと考えたからである。

2007年に内閣府が実施した指導要領アンケート調査では、高校の「地理歴史」科目の重要性について、「世界史・日本史・地理全てが重要だと思う」という回答が60.6%を占め、また望ましい「地理歴史」教育として、地理・日本史・世界史の全てを必修とする(41.1%)あるいはそのうちの2科目を必修とする(23.0%)という回答が64.1%となっている。この調査の回答者のうち24歳以下は9.1%で、25～49歳の回答者が大半(75.8%)を占めているので、自分の体験を踏まえて、世界史のみが必修とされることへの違和感を示した可能性もある。その一方、1科目のみの必修を容認する回答では、必修科目として日本史を挙げた回答が11.7%であるのに対して、世界史を挙げた回答は5.6%に過ぎない<sup>12</sup>。こうした調査の結果も踏まえて、世界史必修が前提となっている環境の中で高校生活を送っていた学生達の意識を検討する。

なお、アンケートを実施した授業のいずれも必修ではなく、学生は自分の意志で受講を選択している。また、免許科目でもあるため、社会科の教員免許のために受講した学生もいるはずである。この点を考慮すると、今回のアンケートの対象とした学生達は、歴史を学ぶ意欲や歴史に対する関心が相対的に高いと考えられよう。

### Ⅲ．アンケートの結果から

アンケートからは表1のような結果が得られた<sup>13</sup>。

#### 質問1) 回答者の現在の学年は？

- ① 1年生：4名      ② 2年生：21名  
③ 3年生：21名      ④ 4年生以上：9名

表1 アンケート回答一覧

回答者	1	2	3a	3b	3c	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	13の内容	14	14の内容	15	16	17	18	19	20				
1	3	1	3	1	3	0	1	2	0	3	2		2	2		2	1	1										
2	3	2																										
3	3	1	4	2		1	2	1	0	1	2	0	2	1		2	1	1							2			
4	3	1	7	1	3	1	1	0	1	1	0	2	1	1		1	1	1							2			
5	3	1	3	1	3	2	1	0	2	0	3	2	2	1		0	1	1										
6	4	1	2	4	AとB	1	2	3	0	2	0	2	2	2		2	1	1										
7	4	1	3	1	1	2	3	0	2	0	3	2	2	2		2	1	1										
8	3	1	1	2	1	2	1	0	2	0	1	1	1	1		1	1	1										
9	4	1	1	1	0	4	0	2	2	0	3	2	2	2		2	2	1										
10	3	1	1	1	3	0	2	1	0	3	2	2	2	2		2	2	1										
11	2	1	3	1	1	2	2	0	2	0	3	2	2	2		2	2	1										
12	2	1	2	2	1	4	0	1	2	0	1	1	2	1		2	2	2										
13	2	2																										
14	3	1	4	2	1	1	1	0	1	2	0	1	1	1		1	1	1								1		
15	3	1	2	4	AとB	1	2	3	0	1	0	1	2	1		1	2	2									1	
16	2	1	4	2	1	1	1	0	1	1	0	1	1	1		1	1	1									2	
17	3	1	3	1	1	3	0	2	2	0	3	2	2	2		2	2	1									1	
18	3	2																										2
19	2	2																										1
20	2	2																										1
21	2	2																										1
22	3	2																										1
23	2	2																										1
24	2	2																										1
25	1	2																										2
26	3	1	1	2	1	1	2	0	2	0	4	2	2	2		1	1	1										1
27	3	1	4	2	1	2	2	0	1	1	0	1	1	1		1	1	1										1
28	3	1	2	2	1	2	1	0	2	0	3	1	2	1		1	1	1										1

高等学校の世界史教育と大学の歴史学

回答者	1	2	3a	3b	3c	4	5	6	7	8	9	10	1000内容	11	11内容	12	12理由	13	1300内容	14	14内容	15	16	17	18	19	20												
29	3	1	7	3年間	2	1	1	1	0	1	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											
30	2	1	1	1	1	3	2	3	0	2	0	3	1	0	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1										
31	2	1	1	1	1	2	3	0	1	2	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1										
32	2	1	1	1	1	3	3	0	2	2	0	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1									
33	2	1	7	3年間	4	1年生A、 以後B	1	2	1	0	1	2	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1									
34	2	1	4	2	1	1	1	0	1	2	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1								
35	4	1	1	1	1	1	3	0	2	0	4	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1							
36	4	1	3	1	1	2	3	0	2	0	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1						
37	4	1	3	1	1	3	3	0	2	0	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
38	4	1	3	1	1	3	3	0	1	2	0	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
39	1	1	7	3年間	4	1年生A、 以後B	1	3	0	2	1	2	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1				
40	1	1	2	4	A&B	2	3	0	2	2	0	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1				
41	3	1	1	1	1	2	1	0	2	0	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			
42	4	1	7	3年間	4	A&B	1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
43	2	1	1	1	1	3	0	2	0	3	1	2	0	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
44	3	1	1	1	1	3	0	2	0	2	0	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
45	1	1	4	2	1	1	3	0	1	1	0	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
46	2	1	1	2	1	3	0	2	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
47	2	1	3	1	3	3	0	2	0	3	2	0	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
48	2	1	2	2	1	4	0	1	2	0	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
49	4	1	1	1	1	1	1	0	2	0	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
50	3	1	4	2	1	1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
51	3	1	7	3年間	2	1	2	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
52	3	1	4	2	1	3	0	2	1	2	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
53	2	1	2	2	1	2	1	0	2	0	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
54	2	1	4	4	A&B	1	2	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
55	2	1	4	2	1	1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1



当該の授業のうち1年生が履修できるのは環境歴史学のみであったため、このような内訳となった。

#### 質問2) 高校で世界史を履修したか？

① 45名 (81.8%) ② 10名 (18.2%)

予想通り、世界史を履修していない学生が2割近くいた。質問15(高校で歴史関係の科目を履修しましたか?)と照合すると、未履修の学生10名中8名は日本史を履修していたが、2名は歴史関係の授業を全く履修していなかった。

#### 質問3-a) 高校の何年次に履修したか？

※特に注記しない限り、以下の各質問について、人数の割合の分母は世界史履修者の総数(45名)である。

① 13名 (28.9%) ② 7名 (15.6%)  
③ 9名 (20.0%) ④ 10名 (22.2%) ⑤・⑥：0  
⑦ 6名 (13.3%)

⑦の6名のうち1名は1年生の9月頃から半年間、5名は1～3年生の3年間である。

#### 質問3-b) 履修したのは世界史Aか世界史Bか？

① 19名 (41.3%) ② 19名 (41.3%)  
④ 7名 (15.2%)

④の7名はいずれもAとBの両方を履修していたが、そのうち3名は1～2年生の2年間で、1名は2～3年生の2年間で、3名は3年間(うち2名は1年生でA、2～3年生でBを履修したと明記)で履修している。

#### 質問3-c) どのような学習内容であったか？

① 35名 (77.8%) ② 2名 (4.4%)  
③ 7名 (15.6%) 無回答1名 (2.2%)

世界史Aの履修者を含めて、大半は通史を網羅的に学んだことが判る。

#### 質問4) 高校時代、世界史という科目が好きであったか？

①ないし② 27名 (60.0%) ③ないし④ 18名 (40.0%)

小川は、センター試験の受験者の相対的少なさや前述の2007年の内閣府調査における世界史評価を根拠にしなが、「高校世界史は心底嫌われている」と強調している<sup>14</sup>が、この質問4への回答からは、必ずしも世界史が高校生から嫌われる科目ではないと言えよう。但し、前述のように、当該授業の受講者において、相対的に歴史への関心や歴史学習の意欲が高い可能性を考慮する必要はある<sup>15</sup>。

科目別に見ると、世界史Aの履修者では  
① 2名 (10.5%) ② 6名 (31.6%) ③ 10名 (52.6%)  
④ 1名 (5.3%) ※分母はAの履修者19名  
であるのに対し、Bの履修者では内訳が  
① 8名 (42.1%) ② 6名 (31.6%) ③ 3名 (15.8%)  
④ 2名 (10.5%) ※分母はBの履修者19名  
となり、AとBの両方を履修した学生では  
① 2名 (28.6%) ② 3名 (42.9%) ③ 2名 (28.6%)  
④ 0 ※分母はA・Bの履修者7名  
である。Aのみの履修者のうち、「好き」・「どちらかといえば好き」と答えた者が4割であるのに対して、Bの

履修者、2科目履修者では、いずれも7割以上が「好き」・「どちらかといえば好き」と答えた。このことは、Aについては「必修」ゆえに本意ながら履修した者が相対的に多いことを示唆している。

#### 質問5) 好きであった理由

A履修者 ※分母は「好き」・「どちらかといえば好き」と回答したA履修者8名

① 4名 (50.0%) ② 1名 (12.5%) ③ 3名 (37.5%)

B履修者 ※分母は「好き」・「どちらかといえば好き」と回答したB履修者14名

① 11名 (78.6%) ② 2名 (14.3%) ③ 1名 (7.1%)

A・B履修者 ※分母は「好き」・「どちらかといえば好き」と回答したA・B履修者5名

① 2名 (40.0%) ② 0 ③ 3名 (60.0%)

A履修者及びA・B履修者では、内容の面白さを挙げた者と教師の教え方を挙げた者の数に著しい差がないのに対して、B履修者では8割が内容の面白さを挙げている。面白いと感じるうえでは勿論、授業方法も影響力を持つ可能性があるが、いわゆる「文系」としてBを選択する者が相対的に多いために、内容自体に興味を引かれる割合が高くなったのかもしれない。

#### 質問6) 嫌いであった理由

A履修者 ※分母は「嫌い」・「どちらかといえば嫌い」と回答したA履修者11名

① 3名 (27.3%) ② 8名 (72.7%) ③ 0

B履修者 ※分母は「嫌い」・「どちらかといえば嫌い」と回答したB履修者5名

① 2名 (40.0%) ② 3名 (60.0%) ③ 0

A・B履修者 ※分母は「嫌い」と回答したA・B履修者2名

① 0 ② 2名 (100%) ③ 0

予想されたように、いずれの履修タイプでも「覚えることが多くて面倒だった」ことを嫌いだった理由に挙げる者が多かった。彼らにとって世界史は、小川の言う「善意で敷かれた苦役の道」だったのであろう。

#### 質問7) 大学入試センター試験での世界史受験

全体 ① 17名 (37.8%) ② 28名 (62.2%)

そのうちA履修者について ※分母はA履修者19名

① 1名 (5.3%) ② 18名 (94.7%)

B履修者について ※分母はB履修者19名

① 11名 (57.9%) ② 8名 (42.1%)

A・B履修者について ※分母はA・B履修者7名

① 5名 (71.4%) ② 2名 (28.6%)

科目としての好き嫌いが必ずしも受験と連動していないことが判る。特にA履修者ではその傾向が著しい。質問8及び9に照らすと、受験科目としての選択には必要の有無が最も大きく関わっている。大学受験が世界史の学習内容に影響していることは間違いないが、それが世界史の学習に対する高校生の態度に直結している訳ではないと言えるのではない。

**質問 8) 受験した理由**

全体 ① 11名 (64.7%) ② 6名 (35.3%) ③ 0

※分母は受験者総数 17名

A履修者 ※分母は受験した A履修者 1名

① 1名 (100.0%) ② 0 ③ 0

B履修者 ※分母は受験した B履修者 11名

① 7名 (63.6%) ② 3名 (27.3%) ③ 0

A・B履修者 ※分母は受験した A・B履修者 5名

① 3名 (60.0%) ② 2名 (40.0%) ③ 0

**質問 9) 受験しなかった理由**

全体 ① 8名 (28.6%) ② 4名 (14.3%)

③ 14名 (50.0%) ④ 2名 (7.1%)

※分母は受験しなかった総数 28名

A履修者 ※分母は受験しなかった A履修者 18名

① 3名 (16.7%) ② 2名 (11.1%) ③ 12名 (66.7%)

④ 1名 (5.6%)

B履修者 ※分母は受験しなかった B履修者 8名

① 4名 (50.0%) ② 1名 (12.5%) ③ 2名 (25.0%)

④ 1名 (12.5%)

A・B履修者 ※分母は受験しなかった A・B履修者 2名

① 1名 (50.0%) ② 1名 (50.0%) ③ 0 ④ 0

**質問 10) 大学の歴史の講義で、高校での世界史学習が役立ったか?**

① 26名 (57.8%) ② 19名 (42.2%)

A履修者 ※分母は A履修者 19名

① 6名 (31.6%) ② 13名 (68.4%)

B履修者 ※分母は B履修者 19名

① 15名 (78.9%) ② 4名 (21.1%)

A・B履修者 ※分母は A・B履修者 7名

① 5名 (71.4%) ② 2名 (28.6%)

高校で学んだ世界史の有益性は、A履修者より B履修者の方がより実感している。後者がより授業に関心があった、あるいはより詳細な通史を学んでいるために、知識が役立つ場面があった可能性もあるが、実際に役立ったと感じた理由の記述を見ると、内容の点で Aと Bの履修者の間に大きな差異はない。

**有益性を感じた理由**

- ・基礎的な知識があったため、講義内容を理解しやすかった。
- ・講義で、[学生が高校で] 学んだ内容であることを前提条件で [講義が] 進められるという点。
- ・下地がある程度できていたためスムーズな理解ができる。
- ・なんとなく覚えている知識を当てはめることができる点。
- ・大学の授業で出てくるから。
- ・なんとなく覚えているような箇所があった。
- ・基礎的なことが分かっていたことで、人物の裏話等がよりおもしろく感じられた点。
- ・歴史の大まかな流れを把握した上で教授の話聞くこ

とができ、理解の速度をはやめるのに役立った。

・世界中を基礎的に学んだので、他の人が知らないようなイスラム世界や東南アジアの知識がある点、スムーズに授業が入る。

・講義の内容についていきやすい。

・ヨーロッパ地域史論にて [役に立った]。

・単語の意味。

・授業を理解しやすかった。単語を初めから知っていると思度度が上がったと思う。

・たまに世界史で学んだ出来事や事件が言及されることがあるため。

・歴史的事象に聴き覚えがあり、入りやすかった (知識)。内容を活かして学ぶことができた。

・ある程度歴史の流れを理解していた方が、先生方の専門的な内容にもついていきやすい。

・予備知識がないとついていけない話があった。

・年号や出来事を覚えていて役に立ったことがある。

・カノッサの屈辱 [について覚えていた?]

・用語が分かる。

・高校で先生が地図をよく書いていたので、国の位置と勢力図がすぐ頭に浮かぶ。物語のように頭に入っているため、一つの事件から色々芋づる式で情報が出てくる。

・ふとした時に思い出す語呂合わせで覚えた年号が時代把握に役立った。

・世界史を受けていない人よりも名前がわかるので、なんとかついていける。

・大学の講義と高校時代の知識がつながった (レイチェル・カーソンが『沈黙の春』を書いた背景が理解できた)。

**質問 11) 歴史以外の講義で高校での世界史学習が役立ったか?**

① 17名 (37.8%) ② 28名 (62.2%)

A履修者 ※分母は A履修者 19名

① 5名 (26.3%) ② 14名 (73.7%)

B履修者 ※分母は B履修者 19名

① 9名 (47.4%) ② 10名 (52.6%)

A・B履修者 ※分母は A・B履修者 7名

① 3名 (42.9%) ② 4名 (57.1%)

歴史関係の講義に比べると「役に立った」実感が低いのは、講義の内容と歴史との関連性の度合いを考えれば当然であろう。歴史関係の講義に対する回答と同様、B履修者の方が「役立った」とする率が高いのは、相対的に高校での学習内容=知識の幅が広く、また回答者の中での知識の定着率が高いためと考えられる。いずれにしても「役立った」という実感の多くは、知っていた単語や事象が授業で出てきたからという程度ではなく、より積極的に高校での学習を踏まえて講義の理解が深まったというものである。

**有益性を感じた理由**

・大学で世界史の知識が役に立った。

・政治学など歴史と絡むところ。

- ・様々な講義でたまに出てくるときに役に立った（教育史など）。
- ・国際政治学などで時代背景が分かる点。
- ・スパルタ教育など、教育史と関連があった。
- ・世界情勢を見るとき話が分かりやすかった。最近だとアメリカとキューバの国交など。
- ・教授が何気なく言った知識が高校の世界史で学んだことであることが多々あり、理解しやすかった。
- ・人との話を退屈させない点。
- ・海外についてのニュースや番組のときに役に立つことがある。
- ・音楽の講義で中世ヨーロッパの知識が役に立った。
- ・国際法の授業での領土紛争の判例を歴史的に説明できた。
- ・テレビで出てきた内容をより理解できた。
- ・教育史で聞いたことがあるな、と。
- ・政治経済・社会系の授業。
- ・イスラム国の主張する根拠がすぐに分かった。

**質問 12) 大学の歴史の講義と高校の世界史の関連はあると思うか？**

- ① 23 名 (51.1%)    ② 21 名 (46.7%)    無回答 1 名 (2.2%)  
 A 履修者            ※分母は A 履修者 19 名  
 ① 7 名 (36.8%)    ② 12 名 (63.2%)  
 B 履修者            ※分母は B 履修者 19 名  
 ① 14 名 (73.7%)    ② 4 名 (21.16%)    無回答 1 名 (5.3%)  
 A・B 履修者        ※分母は A・B 履修者 7 名  
 ① 2 名 (28.6%)    ② 5 名 (71.4%)

約半数の学生が高校の世界史と大学の歴史の講義（おそらく主に筆者の講義を念頭に置いている）との間に関連があると感じている。楽観はできないものの、そのような学生の実感が定着してくれば、高校と大学の歴史教育の接続はより容易になっていくであろう。関連があると思う理由、ないと思う理由を具体的に見ると、短絡的あるいは的外れな意見も見られるが、ある程度まで大学の講義の背後にある教員の意図を汲み取ってくれているように思う。

**関連があると思う理由**

- ・興味関心を研究につなげることができる。
- ・高校で世界史を学んだことで、大学でも積極的に学ぶきっかけになった。
- ・講義は高校の世界史教育を基礎においているため。
- ・高校の単語の理解にさらに深い理解ができるようになる。
- ・多分世界史 B を履修していた人は、少なからずつながりを感じているのではないか。世界史 A は内容がうすくてあまり覚えていない。
- ・高校までの世界史をより発展させた講義が多いと感じる点。
- ・高校で学ぶことが大学での基礎的な知識になるという点。

- ・高校の知識をベースに掘り下げるから。
- ・高校でやった知識のさらに深く学習するのが大学の講義であると思う。
- ・世界史でやった基礎的な知識もふまえていると思うので。
- ・未履修でも受講できるが、履修していたことで役に立つ場面があったため。
- ・大学の講義では言及はされても細かい部分や出来事、流れについて話されることはないため。[つまり高校での世界史を前提としているという意味か？]
- ・この講義のように歴史主体であれば、学んだことがいかせる。
- ・応用になっている。
- ・高校での授業を前提に講義がされるから。
- ・教科書で見た単語がチラホラある。
- ・高校までのものをベースに講義が進んでいると思う。

**関連がないと思う理由**

- ・くわしい内容で 1 つのテーマにしぼった講義だから。
- ・高校での世界史 A は単なる史実の羅列であり、理解にまで至らない。理解が乏しい中で探究的な大学の講義を受けるのは難しいし、余り効果的ではない。
- ・[両者の関連性が] 分からない。
- ・大学の講義は狭く深く学ぶのでつながりが分らなかった。
- ・世界史 A の内容を何となくぐり抜けてくると、何も覚えておらず、つながりが感じられない。
- ・高校で習った内容がでてこないから。
- ・高校での世界史はただ覚えるだけ、事実を知るだけだが、大学は一つ一つについて考えるから。
- ・2 年も 3 年も前にやったことはほとんど覚えていなくて、つながっているかどうかよく分からない。
- ・高校までの概説的なレベルではなく、研究として歴史を扱うようになるから。
- ・大学の授業は専門的なので、高校までの知識はあまり役に立たないから。
- ・深く掘り下げていることが多いので、そこまで役立っている感覚がない。
- ・高校で覚えたものをそんなに使っているとは思わない。

**質問 13) 講義以外で高校での世界史学習が役に立ったか？**

- ① 24 名 (53.3%)    ② 20 名 (44.4%)    無回答 1 名 (2.2%)  
 A 履修者            ※分母は A 履修者 19 名  
 ① 6 名 (31.6%)    ② 12 名 (63.2%)    無回答 1 名 (5.3%)  
 B 履修者            ※分母は B 履修者 19 名  
 ① 13 名 (68.4%)    ② 6 名 (31.6%)  
 A・B 履修者        ※分母は A・B 履修者 7 名  
 ① 5 名 (71.4%)    ② 2 名 (28.6%)

この質問に対する回答でも、半数以上の学生が世界史

の有益性を感じている。具体的な理由を見ると、適切な理由なのかと迷うもの、ニュースを見たとき解ったというような単純なものも少なくないが、自分が高校で世界史を学んだことを日常で有益だと感じることは大切であろう。それは積極的に歴史を考える態度につながるからである。

**有益性を感じた理由**

- ・高校の世界史で、第一次大戦について学び、戦争について日頃から興味を持つようになった点。
- ・ニュースを聞いた際に背景にあるものを歴史的に考えられるから。
- ・ニュースや世界の情勢を考えると、スムーズに理解できる。
- ・教員採用試験。
- ・ニュースを見たとき、その国について分かることがある。
- ・世界のニュース、社会のニュースが分かりやすい点。
- ・世界で起こったニュースなどを聞いたときに、高校の世界史で学んだことに関連することが多々あり、ニュース内容の理解が早まったこと。
- ・女の子としゃべるとき、話のネタになる。
- ・海外についてのニュースや番組のときに役に立つことがある。
- ・歴史系の映画や番組、本を見たとき、内容がわかると楽しい。
- ・なんとなく世界史の知識があった方が良いと思うから。
- ・教養（だがあまり覚えていない）。
- ・物事を考えるときに、昔の人はどうしていたんだろうと、歴史を省みながら考えることがある。
- ・世界史以外を学ぶ時にも背景を理解できた。
- ・ゲームや漫画で出てくることがあり、楽しめることがある。
- ・世界時事について、幅広い観点で考えることができる。
- ・ニュース・テレビ番組が面白い。
- ・教採の一般教養で出ました。
- ・ニュースが理解しやすい。
- ・博物館において、教科書、資料集で目にしたことがあるものは、より興味をもってみる点。
- ・イスラム国の主張の根拠が分かった。

**質問 14) 世界史学習を振り返って、学びたかった点やもっと積極的に学ぶべきだったと思うことはあるか？**

- ① 29 名 (64.4%)    ② 16 名 (35.6%)  
A 履修者            ※分母は A 履修者 19 名
- ① 9 名 (47.4%)    ② 10 名 (52.6%)  
B 履修者            ※分母は B 履修者 19 名
- ① 17 名 (89.5%)   ② 2 名 (10.5%)  
A・B 履修者        ※分母は A・B 履修者 7 名
- ① 3 名 (42.9%)    ② 4 名 (57.1%)

6 割以上の学生が真剣に世界史学習を捉えていること

が判る。具体的な内容を見ると、おそらく高校時代には面倒なだけだと思っていた文化史の重要性や近代史の重要性への気づき、あるいはテストのためだけに勉強すれば事足りると思っていたことへの反省等、彼らが大学に入ってから経験の踏まえて、認識を改めていることがうかがえる。

**具体的な内容**

- ・もう少し近世以降の歴史について学んでおきたかった。
- ・世界史 A で先生は大体を網羅してくれたが、時間の関係で飛ばした所もある点。
- ・現在西洋史分野の勉強をしているが、過去の知識があれば何かと今の勉強のたすけになるんじゃないかと思うから（日本史の方はかなり覚えていたので、それとのギャップが大きいというのがあります）。
- ・教科書の解説（よりの確に言えば音読）ではなく、「授業」をしてほしかった。事象中心ではなく人物中心の解説が欲しい。
- ・もっと具体的に学びたかった。特に近現代の歴史について。
- ・アジアの近代史について。
- ・世界史 A の段階で古代～現代まで広く浅く学び、各年代の特色を学びたかった。
- ・分かってくるとおもしろいところがあるので、カタカナは苦手だが、興味をもてばよかった。
- ・古代から始まったので、近代の授業が駆け足になってしまっていたが、近代史こそ一番よく分かっているべきだと思うので、近代史をもっと積極的に学ぶべきだった。
- ・特定の歴史的な事象が歴史上においてどのような意味を持っているかを学びたかった点。
- ・ユーゴスラヴィア史を知りたい。
- ・日本の時系列と比較して学習するとよりよかったと思う。
- ・年号とか、全体史がつかみやすくなるので、もっとしっかり覚えていればよかった。
- ・もっと具体的な内容も知ったら面白かったかなと思う。
- ・毎回のテストのためだけに勉強したので今となっては全く内容を思い出せず、興味あることを積極的に学んだり、調べたりするべきだった。
- ・東洋史の学習が特に知識が足りていないと感じた。
- ・もっと具体的に細かく学べば良かったと思うことは多く感じます。歴史にかくれた事件などは非常におもしろいものが多く、その時代の人間関係や時流はとても興味深く思えるからです。
- ・言葉だけでなく流れをみておけばよかった。
- ・時代の流れをつかむこと。
- ・第二次世界大戦以降の現代史をもって学びたかった。
- ・年号をもっとしっかり覚えておくべきだと思った。
- ・世界の面白い歴史 [を学びたかった?]

- ・文化が苦手だったので、ちゃんとしておけばよかった。
- ・教育実習に行ったとき知識不足を感じた。
- ・文化史は暗記しただけで終わったが、もっと根拠や流れをベースに学ぶべきだった。

#### 質問 15～20) 世界史未履修者に対して

未履修者 10 名のうち日本史履修者が 8 名、歴史関係の授業を履修しなかった者が 2 名で、高校卒業後に世界史を改めて学んだ者はいなかった。大学の講義で世界史を学んでおけばよかったと思った経験を持つ者は 7 名 (70.0%)、講義以外については 2 名 (20.0%) である。また、大学の歴史の講義と高校世界史との関連を肯定した者は 5 名 (50.0%) いた。

#### IV. 考察とまとめ

以上のアンケート結果から、少なくとも半数の学生は、半年間の講義の中で、自分達が高校で学んだ世界史が一過性のもの、あるいはテストのためだけにあるものではないということを多少とも認識したと判断できる。しかし、高校世界史の意義を実感しないと答えた学生も少なからずいる。こうした相違の要因としては、歴史の勉強が好きか嫌いかという個人的差異が予想される。それは高校の授業や大学の講義の内容が理解できるか否かということにも、当然つながるからである。

そこで、質問 4 (高校時代、世界史という科目が好きでしたか?) と質問 10 (大学の歴史関係の講義を受講するなかで、高校で世界史を学んだことが役に立ったと感じたことはありますか?) 及び質問 12 (大学における歴史の講義は、高校までの世界史教育とつながっていると思いますか?) に対する回答から、世界史に対する姿勢や得意・不得意の意識と、自分が学んだ世界史の意義の実感や、大学での歴史教育とのつながりの認識がどの程度の関連性を持っているかを検討した。質問 4 では、全体の 6 割が① (好き) ないし② (どちらかといえば好き) と回答し、科目別に見ると、A のみの履修者のうち①ないし②と答えた者が 4 割であるのに対して、B の履修者及び A・B 2 科目の履修者では、それぞれ 7 割以上が①ないし②と答えている。

まず、高校時代の世界史に対する態度 (好き/嫌い) と、世界史の学習が大学での歴史学の講義を履修する際に役立ったと思うかという意識の関連性を検討するため、クロス集計と  $\chi^2$  検定を行った。その際に、世界史に対する態度は「好き」と「どちらかといえば好き」を合わせて 1 つの群とし、同様に「嫌い」と「どちらかといえば嫌い」を合わせて 1 群とした。クロス集計表は次の表 2 の通りである。 $\chi^2$  検定の結果、 $\chi^2(1)=4.39(p<.05)$  となり有意な関連性が見られた。残差分析を行った結果、世界史が好きだと回答した者は大学での歴史学の講義に役立ったと考えており、嫌いだと回答した者は役立っていないと考えていた (いずれも  $p<.05$ )。質問 10 につい

ては全体の半数超が、高校で学んだ世界史が大学の歴史の講義で役立ったと答え、科目別に見ると特に B 履修者でその割合が高い。「役立った」とする根拠において A 履修者と B 履修者とで大きな相違はないが、これを質問 4 への回答と照合すると、「基礎的な知識があったため、講義内容を理解しやすかった」、「下地がある程度できていたためスムーズな理解ができる」、「基礎的なことが分かっていたことで、人物の裏話等がよりおもしろく感じられた点」、「歴史の大まかな流れを把握した上で教授の話聞くことができ、理解の速度をはやめるのに役立った」、「講義の内容についていきやすい」、「授業を理解しやすかった。単語を初めから知っていると理解度が上がったと思う」、「歴史的事象に聴き覚えがあり、入りやすかった (知識)」、「内容を活かして学ぶことができた」、「ある程度歴史の流れを理解していた方が、先生方の専門的な内容にもついていきやすい」、「用語が分かる」、「物語のように頭に入っているので、一つの事件から色々芋づる式で情報が出てくる」等、講義の理解に関わる積極的理由を挙げているのは、世界史が好きだった (①ないし②) と回答した学生である。

表 2 大学の歴史講義に対する高校の世界史の有用性・関連性

大学の歴史講義に役立ったことが		ある	ない	合計
嫌い/どちらかといえば嫌い	人数	7	11	18
	期待値	10.4	7.6	18
	調整済み残差	-2.09	2.09	—
好き/どちらかといえば好き	人数	19	8	27
	期待値	15.6	11.4	27
	調整済み残差	2.09	-2.09	—
合計		26	19	45

次に高校時代の世界史に対する態度と、世界史の学習が大学の歴史学の講義とつながっているという意識との関連性を検討するため、クロス集計と  $\chi^2$  検定を行った。クロス集計表は下の表 3 の通りである。 $\chi^2$  検定の結果、 $\chi^2(1)=5.80(p<.05)$  で有意な関連性が見られた。残差分析を行った結果、世界史が好きだと回答した者は、高校での世界史の授業が大学での歴史学の講義とつながっていると考えており、嫌いだと回答した者はつながっていないとは思っていなかった (いずれも  $p<.05$ )。

表 3 大学における歴史の講義と高校の世界史との関連性

大学における歴史の講義は高校の世界史とつながっていると		思う	思わない	合計
嫌い/どちらかといえば嫌い	人数	5	12	17
	期待値	8.9	8.1	17
	調整済み残差	-2.41	2.41	—
好き/どちらかといえば好き	人数	18	9	27
	期待値	14.1	12.9	27
	調整済み残差	2.41	-2.41	—
合計		23	21	44

このように、高校時代に世界史が好きであったか嫌いであったかという、歴史学習に対する学生個人の志向が、大学での歴史の講義に対する評価に影響していることが

数値的に確認できた。但し、質問 12 で「関連があると思わない」と回答した学生の挙げる理由を見ると、「高校で覚えたものをそんなに使っているとは思わない」、「高校までの概説的なレベルではなく、研究として歴史を扱うようになるから」、「大学の授業は専門的なので、高校までの知識はあまり役に立たないから」、「知識の有無よりも考えることが重視される場面が多いから」、「くわしい内容で 1 つのテーマにしぼった講義だから」、「大学の講義は狭く深く学ぶのでつながりが分からなかった」、「深く掘り下げていることが多いので、そこまで役立っている感覚がない」、「高校で習った内容がでてこないから」といった回答が目立つ。加えて質問 10 の自由記述と照合すると、「芋づる式で情報が出てくる」、「用語が分かる」、「年号や出来事を覚えていて役に立ったことがある」といったことから、高校で学習した世界史が大学の講義で「役に立った」と回答しているにもかかわらず、質問 12 では両者に「関連性がない」と回答した学生も複数いた。実際には、大学の講義は高校での世界史学習を踏まえている。授業ではそのことを強調したつもりであり、また関連性を肯定した学生の回答はそうした講義の意図を理解していたが、必ずしもすべての学生にこちらの意図が伝わらなかった。これは大学で授業をする側の問題であり、今後の講義についての改善点である。

一方、「高校での世界史 A は単なる史実の羅列であり、理解にまで至らない。理解が乏しい中で探究的な大学の講義を受けるのは難しいし、余り効果的ではない」、「世界史 A の内容を何となくぐり抜けてくると、何も覚えておらず、つながりが感じられない」、「高校での世界史はただ覚えるだけ、事実を知るだけだが、大学は一つ一つについて考えるから」という回答は、高等学校の世界史教育の在り方への学生なりの批判である。高校の現場からすれば、こうした学生の意見には反論もあろうが、このように高校生から受け取られる部分が世界史教育にあるということは、検討すべき問題であろう。

なお、質問 10 及び 12 の回答を学年別に見ると、10 について①と回答した者は、1 年生で 4 名中 1 名 (25%)、2 年生で 21 名中 11 名 (52.3%)、3 年生で 21 名中 12 名 (57.1%)、4 年生以上で 9 名中 2 名 (22.2%) である。また 12 について①と回答した者は、1 年生で 4 名中 2 名 (50.0%)、2 年生で 21 名中 8 名 (38.1%)、3 年生で 21 名中 12 名 (57.1%)、4 年生以上で 9 名中 1 名 (11.1%) である。さらに質問 14 で①と回答した者の割合は、1 年生で 50.0%、2 年生で 42.8%、3 年生で 71.4%、4 年生で 33.3% であった。いずれも 3 年生で最も割合が高いことから、学年が上がって体験を重ねることが必ずしも歴史教育への認識に影響する訳ではないものの、ある程度の相関性を見ることはできる。

そして、質問 14 に対する回答を見る限り、学生達はそれぞれに歴史学習に対する従来の自分の姿勢を反省し

ている。大学の講義は必ずしも必修という制度に拘束されている訳ではない。今回のアンケートの対象とした 3 つの授業にしても、学生は自ら選択して受講しているのである。そうした彼らのモチベーションを活用すれば、たとえ (何人もが回答で書いているように) 高校で学んだことを殆ど忘却してしまっていたとしても、より積極的に歴史の学習に向き合わせることは可能である。そのためには、高校の世界史で学ばせる事柄の吟味も含めて、知識と思考のバランスをどのように取るかが問われる。何よりも、歴史学という学問の性格、即ち過去の「事実」や事項を暗記することが目的ではなく、また単に研究者の興味本位で過去の事実を探るのでもなく、現代の目で過去を検討し、それをもって現代を考え直したり、自分達の社会・世界の在り方を見直したりする力を持っているのだということを、大学生はもちろん、高校生の段階でも認識させることが重要であろう。

「歴史家が歴史をつくる」とかつてカーは指摘した<sup>16</sup>。高校の世界史教育も、過去の事実を覚えることが最終的な目的ではない。多くの歴史家が指摘し、今では半ば常識のように共有されている歴史の主観性の認識、即ち、歴史の客観性とは主観の総体、あるいは小田中の言を借りれば「コミュニケーションに正しい認識」であるという意識は、高校の現場でも共有されている<sup>17</sup>。筆者の講義でもそうした点は折に触れて強調したつもりであるが、アンケートの回答を見る限り、彼らは「知る」ことを重視しているように思える。ただ、そこに受験勉強の弊害が及んでいるとは必ずしも言えない。アンケートで見たように、実は受験は、世界史と向き合う学生達の意識にそれほど影響していないからである。

## V. おわりに

今回のアンケートは専門科目の 3 つの講義の受講者を対象とした。同じアンケートを教養の授業で実施すれば、かなり異なる結果が得られる可能性もある。しかし、限られたデータではあるが、本論で分析したように、大学の歴史学の授業に対する学生達の姿勢の背後では、彼らが高校で学んだ、あるいは「学ばなかった」世界史が具体的に意識されている。大学での「世界史」の試みが進められているなか、我々はより積極的に高等学校の世界史教育と大学の歴史教育の接続を考えていかなければならないであろう<sup>18</sup>。

ところで、世界史未履修の学生に対する質問 18 (講義で世界史を学んでおけばよかったと感じたことはあるか?) で、「ある」と回答した学生が挙げた理由を見ると、彼らの多くは、「高校で世界史を詳しくやっていたら、講義の理解が深まったのかなと感じた」、「今の世界が、どのようなつくりで成り立っているかが分かった」、「知識として知っているかどうかで話が分かるかどうかが大きく違うと感じたから」、「日本史と平行 [原文ママ] し

てどんなことが世界で起きているのか [を知りたかった]」、「時代背景がよくわからないから。各時代の特徴とか」等、世界史を履修しなかったことが現在の自分の学習・研究に不利益となっていることを認識している。

勿論、高校で世界史を学んでいなくても、大学で歴史の知識や理解を補強することはできる。そのために必要なのは、歴史を学ぶことに対する学生達の意欲と認識である。それは簡単に喚起できるものでもないが、今回のアンケート調査を手がかりに、高校世界史を踏まえた大学の歴史教育の方向性をこれから検討していきたいと思う。

## 文献

- 梅津正美 (2006) 『歴史教育内容改革研究—社会史教授の論理と展開』、風間書房
- 大阪大学歴史教育研究会 (2014) (編)：『市民のための世界史』、大阪大学出版会
- 小川幸司 (2009)：「苦役の道は世界史教師の善意でできつつめられている」『歴史学研究』859、191-200 頁
- 小川幸司 (2011-2012)：『世界史との対話』上・中・下、地歴社
- 小田中直樹 (2004)：『歴史学ってなんだ？』、PHP 研究所
- 小田中直樹 (2007)：『世界史の教室から』、山川出版社
- 高等学校歴史教育研究会 (2014)：「歴史教育における高等学校・大学間接続の抜本的改革—アンケート結果と改革の提案— (2014 年 9 月)」<http://ch-gender.sakura.ne.jp/wp/wp-content/uploads/2014/12/452defa6de42a28e9313c2f82b6405d3.pdf> (2016 年 8 月 20 日最終閲覧)
- 田尻信壹 (2013)：『探究的世界史学習の創造：思考力・判断力・表現力を育む授業作り』、梓出版社
- 内閣府 (2007)：「学習指導要領に関するアンケート調査結果 (2007 年 12 月 11 日)」[http://www8.cao.go.jp/kisei-kaikaku/publication/2007/1211/item071211\\_01.pdf](http://www8.cao.go.jp/kisei-kaikaku/publication/2007/1211/item071211_01.pdf) (2016 年 7 月 1 日最終閲覧)
- 羽田正 (2011)：『新しい世界史へ—地球市民のための構想』岩波書店
- 福井憲彦・田尻信壹 (2012) (編著)：『歴史的思考力を伸ばす世界史授業デザイン：思考力・判断力・表現力の育て方』、明治図書出版
- 南塚信吾 (2009)：「大学において世界史教育は可能か？」『歴史学研究』859、200-210 頁
- 南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵 (2016) (責任編集)『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える』、ミネルヴァ書房
- 文部科学省中央教育審議会 (2006)「社会・地理歴史・公民専門部会におけるこれまでの主な意見 (初等中等教育分科会、第 7 回社会・地理歴史・公民専門部会、

- 2006 年 8 月 2 日、資料 9) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/020/gijiroku/05113001/009.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/020/gijiroku/05113001/009.pdf) (2016 年 7 月 18 日最終閲覧)
- 文部科学省 (2009a)：『高等学校学習指導要領 (平成 21 年 3 月)』、[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/fieldfile/2011/03/30/1304427\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf) (2016 年 7 月 26 日最終閲覧)
- 文部科学省 (2009b)：『高等学校学習指導要領解説地理歴史編 (平成 21 年 12 月・平成 26 年 1 月一部改訂)』[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/fieldfile/2014/10/01/1282000\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2014/10/01/1282000_3.pdf) (2016 年 8 月 1 日最終閲覧)
- ウィルソン、ノーマン・J (2011)：『歴史学の未来へ』(南塚信吾・木村真監訳)、法政大学出版局
- カー、E. H. (1962)：『歴史とは何か』(清水幾太郎訳)岩波書店
- ブロック、マルク (2004)：『新版歴史のための弁明—歴史家の仕事』(松村剛訳)、岩波書店

## 注

- 1 小川幸司 (2009)、191-192 頁。
- 2 ブロック (2004)。ただし引用部分は以下によって翻訳した。Marc Bloch (1886-1944), *Apologie pour l'histoire ou métier d'historien* (1949) [http://classiques.uqac.ca/classiques/bloch\\_marc/apologie\\_histoire/bloch\\_apologie.pdf](http://classiques.uqac.ca/classiques/bloch_marc/apologie_histoire/bloch_apologie.pdf) (2016 年 8 月 20 日最終閲覧)
- 3 高等学校歴史教育研究会 (2014)、3-4、10-14 頁。
- 4 小川幸司 (2011-2012)；梅津正美 (2006)；田尻信壹 (2013)；福井憲彦・田尻信壹 (2012)。
- 5 小田中直樹 (2007)。
- 6 高等学校歴史教育研究会 (2014)、5、21-22 頁。
- 7 同上、36 頁。
- 8 南塚信吾 (2009)
- 9 南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵 (2016)。
- 10 各授業のアンケートを実施した時点での学生の数は、環境歴史学 16 名、ヨーロッパ地域史論 27 名、世界システム概論 20 名である。但し、複数の授業を重複して履修した学生が含まれるため、アンケートの回収数はそれよりも少ない。また、ヨーロッパ地域史論は人文学部の西洋史概説Ⅱにも読み替えられているため、回答者 27 名のうち 10 名は人文学部の学生である。
- 11 文部科学省 (2009a)、18 頁；文部科学省 (2009b)。
- 12 内閣府 (2007)、3、8、13 頁。
- 13 紙面の都合上、世界史未履修者に対する質問 18～20 の自由記述は省略した。
- 14 小川幸司 (2009)、191 頁。
- 15 2006 年の中央教育審議会初等中等教育分科会の資料には、高等学校からの「地理歴史科 [「世界史」で

はない（筆者）]、公民科の各科目に対する生徒の思いは、『大切だし、好きだ』というパターンと『大切だけど、嫌いだ』というパターンに分けられるようだ。地理歴史は前者で政経は後者である」という意見が挙げられている。文部科学省中央教育審議会（2006）、2頁。

16 カー、E. H. (1962)。

17 小田中直樹（2004）；小田中直樹（2007）、46-54頁；ウィルソン（2011）。

18 大阪大学歴史教育研究会（2014）；羽田正（2011）。

\* 本研究では徳橋（第1筆者）が全体を、小林（第2筆者）が統計分析を担当した。

（2016年8月31日受付）

（2016年10月5日受理）